

Round 1: THBT governments should let go of dying languages

文責：高柳啓太

A. Ranking

1st: CG, 2nd: OO, 3rd: OG, 4th: CO

B. Discussion

Panel A: 1位-OG, 2位-CG, 3位-OO, 4位-CO (OGとCGは迷っている)

Panel B: 1位-CG, 2位-OG, 3位-OO, 4位-CO (COのExtensionの評価で迷った)

Chair: 1位-CG, 2位-CO, 3位-OO, 4位-OG (2,3,4位はclose)

Chair: CGの評価は総じて高いのに対して、COとOGの評価で大きく分かれている。まずはこの2チームについて話しあう必要がある。

1. COの評価/OOとの比較

Panel B: 確かにOWのまとめと反論は良いが、MOの段階でのエクステンションが説明不足。具体的には”Dying Languageを学ぶChoiceを守る”というものだが、それを支える”mainstream languageを学ばせるsocietal pressureが強い”という分析の説明が少ない。確かにOWのところでjobやnewspaperの話は出てくるが、そもそもsocietal pressureはコンセンサスであり、choiceが奪われるという1 linerでOOより上にはできない。

Panel A: 同じ理由。Societal pressureに頼っているわりにその説明が足りなくて、エクステンションがあまり評価できなかった。

Chair: 確かにエクステンションの説明量は足りないが、ディベートの中で「subsidyがminority languageにおけるchoiceを奪っている」というgovの議論が繰り返されていた中で、choiceというスタンスのもと、「subsidyがminority languageを選ぶというchoiceを担保している」という議論でgovのchoiceの議論を上回ったと思う。

Panel A: たしかにそれはあるけど、choiceを奪われる重要性は結局OOのCulture以外では出していないからOOに依拠している。あと、choiceの話はLOの2nd point、DLOのOGに対する反論で出ている。COはうまくみせたが、貢献度という観点からOOよりは上に来られない。

Panel B: あとOOはOGへの反論をそつなくできているが、OWはCGの議論に返し切れていない印象はある。

Chair: 確かにsocietal pressureの話は過大評価しているかも。ノートを見返したら、確かにOOのところでChoiceの話はされていて、COの説明量がOOより優っているともいえない。

結論：OO>CO

2. OGの評価/CGとの比較

Chair: 次に大きく分かれているのがOGの評価。Panel AはなぜOGを1位にした？

Panel A: OGとCGはまだ迷ってはいる。CGは確かに有効なExampleが多かったが、土台はOGが出していたと思う。具体的には、「languageの進化を止めてしまっている」だった

り、「subsidyがなくても人々が必要だと思うならsustainできる」という話。Minorityのidentityが変わることはPMで話され、languageをsustainできるという話もDPMが学校や家の中というexampleを出して話している。MGがminorityの場合分けをしたのは良かったけど、それまでのラウンドでそこまで曖昧であったかと言われるとそうでもなく、そこまでの貢献だとは思わない。

Chair: 確かに土台はOGが出しているように見えるけど、少し細かくみると、OGのところではなされているidentityの議論はlanguageとの関連性が少し薄い。あと、OGはminorityのidentityが変化することは証明していたけど、subsidyがなぜforceしているのかを証明できていなかった。それに対してCGは、languageがevolveすることを日本語の例を用いながら説明し、minority languageをsustainできることの証明も戦後の日本やイヌイトの例を使って証明ができていた。あと、個人的にMGが最後のほうで話していたintegrationのポイントは説明不足ではあるものの、重要な視点だと思った。この議論は最後まで残っている。

Panel B: Opening Halfではどのようなlanguageについて話しているのか分からなかったところに、関連性のある例を出したのは貢献だと思う。同じく、Sustainできるという議論も例を出して形にしたのはCG。

Panel A: CGとOGは差がないと思っていたから、大丈夫。

Chair: GWのrole fulfillment に関しては、確かにCOへの反論が弱くてよくなかったものの、エクステンションは押せていたし、うまくラウンドをまとめていたと思うから、少なくとも順位を下げる理由にはならないと思う。

結論: CG>OG

3. OOとOGの比較

Panel B: OGはsubsidyをなくすことでchoiceを増やすというポイントを立て、結局それがラウンドにおいてずっと話されていた。OOもsubsidyの必要性を立論しようとしていたけど、fragileという理由だけではあまり評価できない。あとDPMの「cultureを守るうえでlanguageは必ずしも必要ではない」という反論にOOは答えられていないと思った。

Panel A: 私もOOが「languageがcultureの重要な部分を成している」という証明を十分しなかったと感じた。

Chair: まずsubsidyがchoiceを増やすというOGのポイントだけど、最後までsubsidyがある特定の形をforceしているという証明がされなかったと思った。DLOにsubsidyを受け取るか受け取らないかは選択できるとも言われていたけど、なぜminorityが条件のつくようなsubsidyを受け取るのかが分からなかった。次にOOの説明量、ロジックが問題になるけど、最低限は言っていたと思った。LOはlanguageを保護し続けるには施設を作る等で費用がかかり、それは政府にしか払えないと言っていた。DPMの反論は確かに誰にも返されていないが、ラウンドのコンセンサスはlanguageが重要な役割を持つとういことで、実際にOGのidentityの話もそれに依拠している。だからOOのそこの証明責任はそこまで重くないと判断した。

Panel A: 確かにOGのforcedのロジックはわからなかった。けどOOの証明責任は本当に重くないのか。Govにお金がなくてもsustainできるという話をずっとされていた。

Panel B: けど確かにOGはidentityとlanguageの関連が強い前提で話を進めていたことを考えると、cultureを守るうえでlanguageが重要というOO議論の証明責任はそこまで重くないかもしれない。

Chair: あと、強く思ったのは、PMのセットアップが不明瞭だった。どのようなLanguageについて話しているのか、そして何よりidentityについて話しているけど、identityとlanguageの関連性、モーションとの関連性がわかりづらかった。

結論：OO>OG

4. OGとCOの比較

Panel A: さっきも言った通り、COは具体性が欠けていたからエクステンションをあまり評価していない。

Panel B: 同じく。MOのrole fulfillmentという観点からもあまりCOは評価できない。それに対してOGはロジックが弱いものの、subsidyがidentityをforceするというポイントやsubsidyは不必要という分析を出していて、それはラウンドにおいて終始話されていた。

Chair: 僕はCOのエクステンションはあると感じた。OOのfragileという弱いロジックだけだったところにsocietal pressureがあり、それに対抗して平等な状況を作り出すにはsubsidyが必要という話は新かった。ただsocietal pressureの中身は確かに説明されていなかった。

Panel A: あともう一つ考慮すべきなのは、OGはOOへの反論は最低限やっていたのに対して、COは特にCGへの反論が足りていなかった。MOは一つだけのレスポンスだったし、OWもchoiceで返してはいたが、CG全体で押していたsustainできるという話だったり、integrateしたほうがいいというエクステンションを切っていない。

Chair: 確かにそれはある。

結論：OG>CO

A. **Speaker's Score**

PM: 75, DPM: 76 Total: 151

LO: 77, DLO: 75 Total: 152

MG: 79, GW: 76 Total: 155

MO: 74, OW: 76 Total: 150

ラウンドのレベルは比較的アベレージより高いと思った。Languageにrelevantなexampleを多用しながら、languageがsustainできるという話だったり、integrateされるという話を展開したMGがBest Speaker。その他のチームはそこまで差がなかったと判断し、Marginは1ずつにした。